



和文論文作りを通して コミュニケーションを考える

その8 「もし」と「検証」

呉大学看護学部
山下 洵子

ウサギはいまでも、1羽2羽……と数える人が多い。獣肉禁忌の江戸時代、人々は、兎を「ウ（鶉）と鷺（サギ）だから獣ではない」とか「羽（大きな耳がある）から鳥だ」と言い訳して密かに食べていた。その名残だ、ときく。

明治どころか昭和さえすでに「遠くなりけり」の今日でも、日本人は依然としてそれほど肉を食べない。なぜか？

日本人だって、もともと、肉を毛嫌いしていたわけではない。もちろん、狩猟採集が基本であった時代がある。あちこちの縄文時代前後の遺跡から、私たちの祖先は、木の実や魚介を採っていただけでなく、猪、鹿、熊、猿、兎、狸などを狩って食べていた証拠がたくさん出ている。では、いつから獣肉を避けるようになったのか？

■ 肉食禁忌

話を簡単にするために、獣肉の代表として牛肉を取り上げちょっと考えてみよう。

縄文の終わりから弥生時代にかけて、大陸から農耕稲作文明をもつ民族が渡来した。このとき彼らは牛を連れてきたらしい。稲作は日本の気候風土によく合って、米を中心とする農耕文化が列島に広まっていた。牛は農耕や運搬に、あるいは乳をとり乳製品、また、皮革をとって利用するなど、とても重要な動物であった。神事やいけにえなどにも供したようだ。当然、肉を食べることもあったであろう。（ただし、稲作文化以前の遺跡からも牛の骨が出ているので、牛そのものは、現代の私たちが見る牛と同じ遺伝子をもつかどうかは別として、もっと早い時期に貢物や交易品などのかたちで入って来た形跡がある。）

肉食に抑制がかかったのは、仏教の信仰が厚かった天武天皇が出した肉食禁止令（675）に始まる、とされている。その後も歴代の天皇、あるいは政権を手に入れた人たちによって江戸時代まで何度も何度も肉食禁止令、狩猟禁止令などが出された。そうして、肉食を避ける文化は綿々と江戸末期まで続いた。

ところが、もともとの仏教には食べ物のタブーはない、という。日本に入ってきたとき、その教えの五戒のひとつ「不殺生戒」に基づいて独自に肉食への罪意識が展開したもの、と思われる。僧侶による布教活動の影響も大きかったであろう。そうして、日本にもともとあった神道の穢れの意識と重なり、肉食禁忌の方向へ展開していったのだろう。現在もなお、神道の理念として、四足獣の肉を食べるのは「穢れ」なのだそう。

ほとんどの人が神を畏れ、仏の教えに従って生きていた古い時代。科学・技術の恩恵を受け確かな情報が得やすい現代にすむ私たちの想像をはるかに超え、人々は深い信仰のなかに埋まっていたに違いない。殺生をすれば、ばちが当たる、たたりがある、怨霊が出る、極楽往生はない、来世は牛や馬に生ま

やました じゅんこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

れ変わる、穢れて神仏に手が合わされない……。生きることは、そうしたおびえとおそれのなかにあったらう。

それは政の中心にいる人だって同じ。「望月の欠けたることも無し」と思う人でさえ、酒宴にふけていれば、「奢れるもの久しからず」の結末を迎える。地震、雷、火事、病いでもあれば、信心が足りない、牛を食べた祟りだ、などと責められる。良い君主たるには、まさに精進あるのみであったであろう。

もちろん、日本人の肉食禁忌についてはいろいろ異論もある。穢れるから食べないのではなく、肉は酒と同じように贅沢な食べ物であったから（欲望を抑えるのはよいことだから）「食断つ」をした、という見方もある。

そもそも、肉食禁止令は仏教信仰に基づいたものではない、という見解さえある。

奈良や平安時代の肉食禁止令については、実際には牛を食べることまでは禁じていない、あるいは、ある時期だけの制限だったから肉食禁忌に影響を及ぼしてはいない、とする見方もある。また、特に戦乱時代は、食べようにも食べる牛がいなかった、つまり、戦場に出す馬の飼育が奨励され牛がいなくなったから食べようにも現実にはいなかった、という事実も見逃せないであろう。

土地の利用効率を考えると、当然、米を作るほうが牛を育てるよりずっと有利である。牛からは税がとりにくい、米は違う。備蓄もきくし、貨幣のように動かせる。

そうして、稲・米の管理が世を治める人の最も重要な課題となった。「稲の王」として振る舞う天皇を頂点として形成された律令国家の時代から石高制を確立した江戸幕府に至るまで一貫して、支配者が統治をうまくやり遂げるために肉食禁忌の思想を醸成していった、という見解はとりわけ説得力がある。おかみの掟に背く‘ならず者’を取り締まるための方便である。

とはいえ、支配される側は、米作りに精を出さざるを得ない。牛1頭を飼うのをやめて米を作れば3人養える、と計算した人もいる。牛は、雑穀や芋のように密かに育てることはできない。それどころか、「生まれた」「死んだ」と、いちいち届を出さなければならぬとしたら……。その危険をおかしてまでして、牛にこだわる利得があるだろうか？

一方、禁断の方針を出せば、出した側もおいそれと口にするわけにはいなくなる。そんなことをすれば、上に立つ資質に劣る、と家臣は忠心を失うだろう。民の心も離れるに違いない。だから、役牛を食用に回して朝鮮通信使に饗応した広島藩主だって、自分の膳へ牛肉を載せることはしなかっただろうし、同胞に牛肉料理を馳走することもなかったであろう。

米作りに励む（まされる）側に、もういちど目を向けてみる。

日本列島一帯に、稲作文化がどんどん広がっていったことは事実である。しかし、決して、米が広く一般の人たちの口に届くようになったわけではない、ということもまた事実である。特別な階級の人たちとは違い、実際に米を作る人たちにとって、白い飯を腹いっぱい食べることは夢のまた夢の夢。いつもいつも飢えていた。食べるものがなければ、何でも食べた。おいしければなおさら、と想像できる。多分、肉も？しかし、焼いたり煮たりすれば、匂う。それでなくとも、「五人組」の目が光っている。「村八分」は怖い。そのようななかで牛肉を口にするには、何が起こるか予想ができない死をも意味するかけであったらう。

だから、無理をしてまでして、掟に刃向かわない。長いものに巻かれ、大樹の陰で生きる。力をもつ者の理不尽な行為を臨場感あふれるテレビの画面で見ることができるといえる今日でさえ、そうだ。ましてや、情報が今よりずっとずっと乏しく不的確な時代のこと。力をもつ人から咎めを受けるのは怖い、恐い。

それでも、食べた人はいよう。そうして、吐いたり、戻したり、腹痛を起こしたり、命を落としたりした人も出たらう。当時は、壮健な牛を殺して食べることなどまずなくて、病気で死んだものや大怪我をしてもはや役立たずになったものだけを食べたに違いない。健康な肉はとれない。プリオンどころか、寄生虫や細菌や食物アレルギーなどいまの時代なら誰でもがなじみの、食べ物に関する常識はまだない。人体の内部構造についての知識もない。

食べて異常が出た恐ろしい話を見聞きすれば、以後は自ずと避けるようになる。それが食習慣として、共同体のなかに広まっていった可能性は決して小さくはないだろう。3～4世代の人が同居するのが当たり前の時代。いまよりずっとずっと、若い世代の食習慣は古い世代そのままを引き継ぐことが多

かったに違いない。

それだけでなく、「お袋の味」は後を引く。幼い頃に口にしなければ、嗜好として根づかないことは私たちがよく経験するところだ。例えば、犬や猿。私たちの祖先は食べたらしいが、現代の私たちは「食べ物」になる動物として見ることはない。それと同じようなことが、食肉禁忌の時代を生きた人たちの牛を見る目であった、と想像すればよいかもしれない。

こうして、肉食禁忌は人々のあいだにごく自然なかたちで築かれていったのだろう。つまり、牛は、「食べたくて食べたくて仕方がないのに食べてはいけない」動物ではなくて、「特に食べたいとは思わない」身近な生きものとして、人々のあいだに存在していたのではあるまいか。

とはいえ、いつの時代にもいろいろな人がいて、いろいろなことをする。何度も何度も食肉禁止令が出たということは、実際にはしぶとく密かに食べていた人がいた、ということであろう。しかし、決して、おおっぴらではなかった。だから、ウとサギ、あるいはぼたんやさくらやもみじ、そしてまた山鯨を食べたのであろう。あるいはまた、せいぜい、理由をつけて「薬餌」をとる（「薬食い」をする）程度のことであったのであろう。

だから、ペリーが来航して鎖国が解かれ、欧米列強との交流が始まっても、牛は、すぐには日本人一般の食べ物にはならなかった。あこがれの異人たちが、当たり前のこととして肉や乳をとるのを知っても、である。それを裏書きするような話がある。横浜や函館に滞在している外国人が肉や乳を入手したいといったとき、幕府は肉食の禁は国禁であるから簡単に解除できないので、薬用として（食用ではない）提供した、という。

しかし、文明開化の音を聞きながら、人々は肉がおいしくしかも滋養があることを次第に理解するようになった。そこには、欧米の文化や習慣を望ましいものとして国策をすすめた井上馨ら政府高官や、肉食のすすめを説いた福沢諭吉らの啓蒙活動が大きかったであろう。

やがて攘夷主義も消え（弱まり？）、明治天皇は、1871年12月、肉食の禁は謂れなしと宮中で定め、翌年、自ら牛肉を食べて国民に示された。その後は、明治維新の波に乗り、「牛肉を食べないのは文明人にあらず」と広まっていった。

とはいえ、何もかもがすっかり欧米並みになったと自負する今日であるが、それでもまだ、私たち日本人は欧米人の3分の1も牛肉を食べてはいない。洋服を着、靴をはき、絨毯の上で椅子に腰掛けて、ガラス窓の家で生活するのが普通であるが、食の方はまだしっかり和式を抱えこんでいる。

■ 歴史を見る

私は歴史の専門家ではないから、肉食禁忌の確かな解説を知らない。だから、どの解釈が正しくてどれは間違いなどと、大それたことはとても言えない。それどころか、とんでもない間違ったことを正しいと思い込んでいることもあろう、と恐れる。それでも、どれかひとつの解釈だけが正しくて残りは全部完全に間違っている、ということではないだろう、とは思っている。

もし、殺牛儀礼の風習が廃れなかったら？ もし、元（狩猟民族）が日本上陸を果たしていたら？ もし、信長（肉食を好んだという）政権がもっと長く続いたら？ もし、秀吉が「牛馬を売買し、殺し、食する事」を禁止しなかったら？ もし、天草四郎がオランダ貿易でひともうけしていたら？ もし、徳川幕府が、士農工商の下にもうひとつの階層（牛馬の死体を処理しその肉を食べる人たちを卑賤視した）を置かなかつたら？ もし、綱吉が子宝に恵まれたら？ もし、吉宗の時代に初めて鉄砲が伝来したら？ もし、米が輪作できない作物であつたら？ もし、米と一緒に大豆（米が不足する栄養素を十分に補う）をとる食習慣が根づかなかつたら？ もし、毛利が石見銀山でもっと多量の銀を採る技術を開発していたら？ もし、江戸時代の気温が実際より5度低かつたら？ もし、ヒトという種が、牛くらいの大きさの動物であつたら？……

これらたくさんの「もし」のどれも、実際には起こらなかった。歴史に「もし」はない。大切なことは、現実に起こったたくさんの事実が次の事実につながった。なかには、肉食禁忌に直接関わった事実もあろうし、ほんの少し影響を与えただけで終わった事実もあつたであろう。たくさんのいろいろな事実

が複雑にからみあって肉食禁忌へと繋がったのであろう。そこでは、とるに足らないと見える小さな小さな事実もまた、大きく見える事実と同じように重要な因子となった。

そしてまた、そこに至る原因とならなかつたたくさんの事実が存在したこともまた重要な因子となった。実際には存在しなかつた事実のすべてが、実際に起こつた事実の裏打ちをした。“「歴史の直線的推移」というのは幻想です。というのは、現実の一部だけをとらえ、それ以外の可能性から組織的に目を逸らさない限り、歴史を貫く「線」というようなものは見えてこないからです”¹⁾という指摘を重く受け止めたい。

■ 「もし」の検証

私は学生時代、アゲハを実験に使っていた。アゲハは柑橘類の葉しか食べない。毎日毎日、カラタチやミカンの葉を求めて歩きながら、なんとまあ、毎日同じものを食べても飽きないことよ、と一途の嗜好に感嘆(!)したものだ。そして、柑橘類しか食べられない融通のきかない進化の産物に哀れを覚えたことをいま思い出している。

人はアゲハとは違う。「ものを食べなさい。そして、育っていけということは遺伝的にプログラムされているが、なにを食べるか、どう食べるかということは学習しなければだめなのです」²⁾、つまり、何をどう食べるかの具体化のしかたは、私たちがまわりに影響されながら築き上げていく、まさに文化そのものなのである。

いろいろな事実が重なり合い、ただ一回、ただひとつの事実が出て来る。肉食をいまでもあまりしない、という私たちの食文化はそうした歴史の産物である。

まさに、一期一会。

日本人はなぜ、牛肉をそれほど食べないのか、という疑問をときながらうろろうしていたら、なんと看護の場に行き着いた。日頃、私が看護の場とはこんなところではあるまいか、と思っているそのことである。

看護の場は、私がこれまでかかわってきた自然科学の場とはかなり違う。「もし」の仮説をたてても、それを立証することができない。例を増やすこともできない。追試もできない。そうではなくて、「歴史」そのもののなかにある。それぞれ違う時と場のなかで生きてきた他人との関わり。関わる当人もまた、それぞれ違う時と場を生きてきた。「だれもかれも生きとし生けるものがつながれている」³⁾その世界で、生身の人間が、いまこの時この場を他と影響しあいながら自分の歴史そして他の歴史をつくりあげていく、そのような場である。

一つひとつ違うそれぞれの場で、それぞれにきちんと対応できる答を見つけるのは大変難しいことであろう。どのような解析の方法があるのだろうか？ 現場の方々のご見解が伺えたら、とてもうれしい。

文 献

- 1) 内田 樹：寝ながら学べる構造主義，p.82，文芸春秋，2002.
- 2) 日高敏隆：ぼくにとっての学校，p.214，講談社，1999.
- 3) 手塚治虫：ブッダ，p.182，潮出版，1989.